

音楽科における学習指導法の研究

子どもが自ら曲想をさぐる歌唱の授業構成

高知市立朝倉小学校

教諭 北岡 禎子

1 はじめに

小学校音楽教科書の指導書には、歌唱表現の指導について、「歌詞の内容を理解する」「範唱を聴く」「リズム唱をする」「主旋律を聴唱する」などの項目がよくみられる。¹⁾このような指導書の項目は、指導の順序性を踏まえて記載されているという点で重要である。しかし、それをどの歌唱表現の授業にも同じように当てはめると、歌詞を理解させ、範唱し、メロディを理解させる、という指導がパターン化しがちとなり、授業の創意工夫が生じにくい。

また、一方で、音楽的な力量のある教師や、熱意のある教師の指導においては、その思いの強さから、「歌詞をはっきり発音して歌おう」「ここはスタッカートで、ここはレガートで」「拍子感を出して」「ここは弱くして、だんだんクレッシェンドで」というような、教師の解釈による指示が多用されがちである。子どもたち自らが曲のイメージを持つ以前に、教師の解釈によって音楽が表現されてしまうこともある。

このようなマニュアル化した授業や、教師の解釈に表現を近づけていく授業ではなく、子どもたちが曲に初めて出会った時に、これはどんな曲だろうと、自ら曲想をさぐる歌唱の授業構成は考えられないものであろうか。子どもが曲と出会い、楽譜を見て、どんな音で構成されているかを考え、歌詞から情景を想像する。そして、これらのことを用いて曲想をさぐり、生き生きした表現をする、という授業を構成してみたい。

筆者はこのような点を踏まえて、昨年度、子どもたちが楽曲を分析していく「分析シート」を作成した。そして、本研究では、この「分析シート」の有効性を諸説や事例から検討し、子どもが自ら曲想をさぐる音楽科の授業構成を考察した。

2 研究目的

本研究では、「分析シート」が、子どもたちに楽曲を分析させる手段として、有効であるかどうかを検討し、授業プラン作成と実践を踏まえて、楽曲分析を楽曲の表現に生かせる授業を考察する。

3 研究内容

3 - 1 「分析シート」の活用

筆者は昨年度、子どもたちが楽譜を分析していくための教具として、「分析シート」を考案した。これは、子どもたちが楽譜上で気がついた拍子や速さ、楽譜に使われている音符、似ているフレーズなどを発見し、記入していくものである。(補足資料1参照)

楽譜には、速度記号や、音符、拍子記号など、さまざまな音楽の構成要素が組み込まれている。それらの構成要素や歌詞に着目していくことによって、この曲は元気な曲なのか、おだやかな曲なのか、リズムカルな曲なのか、等の曲をイメージしていくことができる。子どもたちが楽曲を自らイメージしていくためには、これらの構成要素に着目させることが必要である。このような意図から、筆者は昨年度、「分析シート」を使って、4年生教材である「エーデルワイス」(作詞：阪田寛夫、作曲：ロジャーズ)や「とんび」(作詞：葛原しげる、作曲：梁田貞)「もみじ」(文部省唱歌)「まきばのこうし」(作詞：小林純一、作曲川口晃)の授業を行った。そして本年度、その児童たちと、本研究の授業プランに入る前に、5年生教材である「こいのぼり」(文部省唱歌)でも「分析シート」を使った。

これまでの「分析シート」による分析場面をあらためて検討すると、子どもたちは楽譜から様々なことを発見し、それらを曲想に関わって追求していることがわかった。以下にその一例をあげる。

事例 1

「まきばのこうし」(4年生楽譜教材)で、「分析シート」を用いて、見つけたことを発表している際、子どもたちは、♩=48 の速さで、拍子は三拍子であることに気づいた。そこで教師はその意見を取り上げ「48 ってどんな速さ？」と問うと、子どもたちは「すごく少ない。ゆっくりなのかな」と答えた。そして実際に、速さをメトロノームで確認していった。その中で、子どもたちから既習教材の「エーデルワイス」も三拍子なのに、その表記が違う(「エーデルワイス」は♩=138)という意見が出た。そこで二つの曲は同じくらいの速さでありながら、曲想の違いで一拍の取り方が異なることに気づいていった。

子どもたちは、「エーデルワイス」においても「分析シート」の活用で楽曲の速さを確認している。事例 1 の場面における子どもたちの気づきは、「分析シート」を使って拍子を意識することが習慣化していたことから可能になったと見受けられることができる。

「分析シート」で子どもたちに音の構成を発見させるためには、教師の提示の工夫も大切である。たとえば筆者は、「まきばのこうし」で以下のような工夫を行った。

事例 2

「まきばのこうし」は、教科書では6段の楽譜となっている(補足資料2-1)。そのような段構成では、子どもたちが、形式や特徴をとらえにくいと考え、筆者は4段の楽譜にした(補足資料2-2)。そして低音部も省略し、より子どもたちが楽譜から、構成要素を分析しやすくした。その結果、「(縦に見て)同じところに休むがある」「1、2、4 段目が似ていて、3段目がちがう」等のことを楽譜から見つけることができた。

このように、「分析シート」を用いることによって、子どもたちは楽譜から情報を読み取ろうとし、意見交換を活発に行う。そして、そのことからさらに、新たな発見につながっている様子も窺われる。また、教師の側も、子どもの分析を意識した提示の工夫を試みるようになる。

3 - 2 楽曲分析の有効性に関する諸説

山田潤次は、M・テイとP・ハックの論²⁾を参考に、「音楽」自体を考察する学習として、以下のことを掲げている。

- ・ 音楽をつくっているものは何かを学ぶ。
- ・ 音楽をイメージすることを学ぶ。
- ・ 音楽を予測することを学ぶ。
- ・ 音楽に反応することを学ぶ。
- ・ 音楽を記憶することを学ぶ。
- ・ 音楽を認知することを学ぶ。
- ・ 違った種類の音楽を弁別することを学ぶ。
- ・ なぜ違った音楽があるのかを理解することを学ぶ。
- ・ 音楽について語ることを学ぶ、等々。³⁾

子どもが楽曲に直面し、自ら表現の工夫を行なっていくためには、上記のはじめの3点が、特に重要である。つまり楽曲を見て、「音楽をつくっているもの」である音楽構成要素に視点をあてて「音楽を予測」し「音楽をイメージ」していく方法をとる必要がある。

小学校学習指導要領音楽編においても、表現の項目の中で、「音楽をつくっているもの」である音楽

構成要素を重視している。たとえば中・高学年の表現の項目には次のような記載がある。「曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする」⁴⁾そして高学年の表現の項目には、「歌詞の内容や楽曲の構成を理解して表現を工夫」すること、また「それぞれの音楽を特徴付けているリズム、旋律、強弱、速度、音色、和音や和声などの要素について鋭く感じ取ったりすること、そして「それらの相互のかかわりについても十分にとらえることができるよう、創意工夫のある学習を進めること」などが提示されている。⁵⁾

つまり、学習指導要領において、音楽をつくっているものとして、リズム、旋律などの音楽の構成要素を意識する重要性が述べられ、それらの指示が細くくなされているのである。

このような音楽の構成要素については、千成俊夫が、音楽の表現性は音の組み合わせと沈黙に由来すると述べ⁶⁾、以下のような表にしている。(下記の表1参照)⁷⁾

(表1) 音楽を構成する要素

要素	内容
リズム	拍、テンポ、リズムパターン、拍子、無拍子、アクセント、音の長さ
メロディ	抑揚、フレーズ、テーマ、問いと答え、朗読、音程
ハーモニー	同時にひびきあう二つ以上の音(協和と不協和等)
テクスチャー	ユニゾン、メロディー対伴奏、ポリフォニー、ヘテロフォニー
調性	主音、核音、音階(長・短音階、各種旋法、各種ペンタトニック、無調等)
形式	フレーズ、節、繰り返し、対照、部分、再帰、各種形式
ダイナミクス	強弱、長さ
音色	ねいろ(声、楽器、自然音、電子音などの人工音)

千成がいうように、音楽はその構成要素の組み合わせで成り立つ。音楽を表現する上で、その組み合わせを意識することは重要である。つまり、そこで楽曲分析が必要になると考えることができる。

音楽の構成要素の意識化は、表現の授業構成においても重要である。八木正一は、どんな曲にも表現が飛躍的に高まる指導のポイントがあると述べ、教師の授業研究として、以下の三つの窓を通した教材分析の必要性を述べている。上記の千成の表は、八木の述べる三つの窓の にあたる。

- 音楽的特徴の窓(拍子、調、速度、メロディ、形式、リズム、高さ、強弱、イメージなど)
- 技術的課題の窓(難しそうなところ、出だし、終わり方)
- 歌詞・曲の背景などの窓(歌詞の解釈、曲の背景や曲にまつわるエピソードなど)⁸⁾

八木が述べている教材分析の三つの窓の内容は、先述した資料1の「分析シート」の項目とほぼ一致する。八木が掲げたポイントは「分析シート」の項目名としてはあげてないが、これまでの授業では「分析シート」の「その他」の項目で、子どもたちが自発的に技術的課題を発見している。つまり「分析シート」の活用は、表現の高まるポイントを探し出す上で、有効な手続きであると考えられる。それを教師だけでなく、子どもたち自らが行なうところが、この授業方法の特徴である。

3-3 「分析シート」を用いた新たな授業構成の考察

以上のような音楽表現における楽曲分析の重要性から、本研究では、「分析シート」を用いて子どもたちが楽曲を分析し、さらにその楽曲分析を楽曲の表現に結びつけることができる授業を考察した。この授業プランは以下の3点を重視している。

「分析シート」の利用によって楽曲を分析する

先にも述べたように、「分析シート」を用いると、子どもたちは、楽譜から様々な音楽構成要素を読み取ろうとするようになる。教師が「ここはこう歌おう」「あそこはこういうふうに歌おう」と指示しなくても、歌う以前に楽譜から何らかの読み取りをする習慣ができる。またそれが全員の前で提示されることで、各自の分析を共有することができる。さらに友達の分析結果を聞いて、活発な意見交換が期待できる。このような効果から、本授業プランでも「分析シート」を用いた。

得た楽曲分析を楽曲表現に結びつける

さらに、今回の授業では、「分析シート」による楽曲分析に加え、分析で得た結果をどう楽曲表現に生かすか、ということに主眼を置いた。具体的には、後述するように、用いる教材の3段目の盛り上がりや、形式や音高の分析から結び付けていくような授業を構成した。

挿絵を利用して、歌詞の語句を吟味して情景を想像させる

歌唱表現の授業で、歌詞の情景を思い浮かべさせることはよくあることである。そのような場面では、教師が語句の意味を説明するにとどまったり、子どもから「 な感じがしました」というような表面的なイメージの発言を引き出すにすぎなかったりすることが往々にしてある。このような歌詞理解については、筆者は、これまで「分析シート」に歌詞の項目を設けることによって、子どもたちを自ら歌詞に注目させるようにしてきた。今回はさらに、より自発的に歌詞を吟味したくなる方法として、複数の挿絵を利用することとした。

後述するように、本研究で用いた楽曲「冬げしき」には、教科書の年代や教科書会社によってさまざまな挿絵が使われている。そこで6冊の教科書の挿絵と、それを見て筆者が描いた3枚の絵の合計9枚を使って、それらのどの絵が歌詞にふさわしいかを選ばせた。絵を選ぶということから、歌詞の中に出てくることばに着目し、吟味して、より思い浮かべる情景を鮮明にさせることが目的である。

上記の3点を踏まえて、5年生を対象に、共通教材である「冬げしき」を取り上げて⁹⁾、授業プランを作成した。(楽譜は補足資料3参照)

本授業プランで用いた教材「冬げしき」は文部省唱歌であり、大正2年に文部省が発行した教科書『尋常小学唱歌(五)』に初めて紹介されている。作詞者と作曲者については不詳である。指導書によれば、簡潔な文語調の歌詞の中に、のどかな日本の冬景色(朝、昼、夕の情景)を歌った、しみじみとした感じの楽曲であると、説明されている。さらに4分の3拍子で、へ長調であること、特定の旋律の反復を持たない二部形式(ただし第1、2、4フレーズはリズムが共通)であること、旋律線の息の長い豊かな起伏を感じ取り、自然な強弱を生かして歌わせたい、などが述べられている。¹⁰⁾ここでの自然な強弱というのは、3拍子の強弱アクセントを強調し過ぎず、旋律線に沿って歌うという意味であろう。特に形式が変化する3段目では、旋律の順次進行に応じた強弱による歌い方が必要であろう。そのような歌い方や表現の工夫を子どもたちの力で見つけることをねらいとした。

また教科書の楽譜は二部合唱になっている。小学校学習指導要領の高学年の音楽科の目標からも、上記の内容に加えて、合唱につなげる二時間構成の授業プランを作成した。¹¹⁾

3 - 4 授業プラン「様子を思いうかべて」とその実践

(1) 授業プランの紹介

本授業プランの授業目標は以下の通りである。

「冬げしき」の楽譜を分析し、歌詞と複数の挿絵を比較することから、楽曲のイメージを把握する。

「冬げしき」の旋律の特徴を生かして、曲想を工夫して表現する。

曲想を生かして二部合唱にする。

これらの目標から、2時間扱いの授業プランを作成し、1時間目の授業を実践した。1時間目は上記の授業目標の、特に を重視している。実践した授業展開は以下の通りである。¹²⁾

(表2) 1時間目の授業展開

学習活動	指導上の留意点
<p>1 既習曲「夢の世界を」を歌う。</p> <p>2 「冬げしき」を学習する。</p> <p>(1) 旋律を把握し、曲の盛り上がりを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4段中1、2、4段が同じリズムで構成されていることを見つける。 ・さらに、2、4段目は後ろ2小節が同じメロディーであることをを見つける ・旋律線を手でたどって歌う。 ・メロディに歌詞をつける <p>(2) 歌詞や楽譜から楽曲を分析する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「分析シート」を見て、楽譜や歌詞から気づいたことを発表する。 ・歌詞のむずかしい語句と成立時期を理解する ・「分析シート」の分析から、3段目の盛り上がりの表現を工夫する。 <p>(3) 情景をイメージして歌う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「冬げしき」の異なる9枚の挿絵を見比べて、歌詞の表す情景を探る ・鑑賞をする ・歌う <p>3 本時をふりかえる</p>	<p>音色、歌声、気持ちをそろえてのびのびと楽しい雰囲気の中で既習曲が歌えるように言葉がけをする。</p> <p>黒板に大きく引き伸ばした「冬げしき」の楽譜を貼る。</p> <p>1、2、4段目のリズムを打って聞かせ、楽曲中のどの段に相当するか、当てさせる。</p> <p>2、4段目に共通する後ろ2小節のメロディーを弾き、どこにあるか当てさせる。</p> <p>一番高い音、低い音の確認をした後、手を体前方に上げて手を上下させながら歌わせる。</p> <p>何回で歌詞唱ができるか目標をもって歌わせる。</p> <p>黒板に、歌詞、拍子、音高、リズムなどの項目に分けて記載できる「分析シート」を貼る。</p> <p>児童から気づいた点が出る都度、「分析シート」に記入していく。</p> <p>歌詞のむずかしい語句の意味を確認させ、成立時期の説明をする。</p> <p>どんな風に歌いたいのか、意見を出させる。</p> <p>9枚の挿絵を黒板に貼り、児童に1番の歌詞に合うと思うものを選ばせ、理由を述べさせる。</p> <p>女性歌手の歌った「冬げしき」のDVDを鑑賞させる。</p> <p>本日の学習を振り返りながら、歌う。</p> <p>次時の予告(3段目4段目を二部合唱にする)をし、本時の学習の振り返りカードに記入させる。</p>

(2) 授業実践と事後の考察

本プランは、2006年11月17日に高知市内A小学校の5年生3クラスで実施した。(一クラス30名)
 本プランでは、子どもたちに宿題としてあらかじめ、「分析シート」の記入をさせた。子どもたちの記述をまとめると、補足資料4のようになる。

授業では、子どもたちは、すでに「分析シート」で分析していることもあり、4段中3段が同じリズムで構成されていることをすぐに見つけた。さらに2、4段目は後半の2小節が同じメロディーであることも見つけた。また旋律線を手でたどる活動では、一番高い音、低い音を明確に示せていた。これは、宿題の「分析シート」の「音の高さ」の分析が結びついたものと考えられる。

そして、分析する場面(上記表2中(2))では、各クラスで様々な意見が出された(補足資料5)。どのクラスにおいても3段目が曲の盛り上がりの部分であることに気づき、その部分の歌い方について意見が出た。そこで、授業では3段目をどう歌うか、というところに分析結果を集約させる発問を行った。曲の一番の盛り上がりはどこかの問いかけに対して、「3段目」という答えが返ってきた。理由は他の段と違っている、一番高い音がある、ということであった。「ではどんなふうに歌いたいのか」

の問いかけに対しては、3段目の「みずとりの」のところから大きくなるようにという意見につながった。そこでは、ある子どもが歌ってくれた表現をもとに、全員で歌ったり、列で歌ったりして、3段目の表現を自分なりに工夫させる活動へと入った。全体的な表現の変化にはつながらなかったが、子どもたちそれぞれの歌い方から、工夫しようとする様子が見受けられた。

授業の後半は歌詞理解の場面である。まず昔の歌詞が使われていることを説明するために、楽曲ができた頃に小学5年生だった人物が現在、92歳になっていることなどの説明を行った。そして「冬げしき」の異なる9枚の挿し絵（補足資料6）から、歌詞の表す情景を探る活動を取り入れた。（下記の写真1）その場面では挿絵に集中し、歌詞と見比べることによって絵を選択する意見をはっきり述べていた。また写真2・写真3のように、前を見入る様子がみられ、意見を求めると、一斉に6名の手が上がった。この挿絵の利用によって、挿絵の表す情景から、歌詞をもう一度、吟味しようとする発言が見られた。（挿絵選択場面の子どもの発言は、補足資料7に掲載する）

写真1

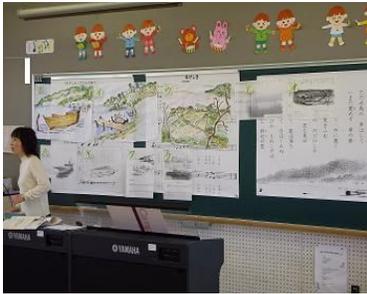


写真2



写真3



授業後の振り返りカードでは「ぼくは冬げしきの3段目をゆっくり入って、と中はやくいくという意見を出しました。やってみたらとてもうまくできました。」という感想が出てきた。さらに教科書の楽譜から、声の重なり合いに目をつけ、次時、合唱をしたいと書いている児童もいた。（補足資料8）これらの感想から、自分たちで音楽の特徴を見つけたことによって意欲的に歌うことができ、表現の工夫につながったことが窺われる。

4 まとめ

長島真人は「『曲想』は作曲家がとらえた主観的な真実の世界であり、音楽によって象徴しようと試みた人間感情の様態である」¹³⁾と述べている。そして長島は、「その中で子どもたちは『曲想』の把握を通して音楽の美しさの本質を探究する力、すなわち『音楽の感性』を豊かなものへと更新していく」¹³⁾とも主張している。

つまり子どもたちは、受け身ではなく自らが曲想をさぐることによって、よりその楽曲の本質へと迫り、その曲を楽しむことができると考えられる。ひいてはそれが表現力にもつながり、音楽に対する感性をも深めていくのではないだろうか。

本稿では、子どもが自ら曲想をさぐる歌唱の授業構成を述べてきた。もちろんこれは授業方法の一例である。歌唱教材によっては、子ども自らが曲想をさぐるものが難しいものもあるであろう。教師が教え込んでいかななくてはならない教材もあるだろう。またグループで協同で学習していくのが理想的な場合もあるかもしれない。しかし一般的な教科書の共通教材であれば、「分析シート」をもとに、子どもたちが個々に分析し、歌唱表現を工夫していくことが可能であると考えられる。

「分析シート」を用いる課題としては、出された意見をどう集約していくかということがあげられる。「分析シート」にしたがって、いろいろな項目の意見が出される。拍子に気づき、速度にも気づく。前に歌った曲より速いなどの意見も出る。しかしそのような個別の分析をその曲全体の解釈とし

て、どのようにつないでいくかが難しい。そのためには、授業の中での子どもの発言のまとめ方や、発問の仕方をさらに考えていかなばならない。たとえば子どもから「こういうふうに歌いたい」という発言がなされたら、子どもたちが「分析シート」によって見つけた音楽構成要素につなげて、構成要素と歌い方との関連に気づかせていく発問を行う等である。

子どもたちから出てきた楽曲分析を、曲全体の解釈へどうつなげていくか、そしてさらにクラス全体のものにするためにはどうすればよいか、これらを他の楽曲においても、考察していくことが今後の課題と考えている。あわせて子どもが自ら曲想をさぐる歌唱の授業構成として、他にどんな方法があるかさらに考えていきたい。

謝辞

本研究に際し、終始温かい目で懇切丁寧に、ご指導くださいました高知大学教育学部の高橋美樹先生、山中文先生、ならびに音楽研究室の先生方、また高橋ゼミ、山中ゼミの学生の皆さんに心からお礼申し上げます。また授業にご協力くださった朝倉小学校の先生方や5年生児童の皆さん、一年間の長期研修の機会を与えてくださいました、関係諸機関の皆様にも、深く感謝申し上げます。

註

- 1)ここでは、一般的な文言をあげた。実際には、たとえば「歌詞の内容を理解して、情景を想像して歌う」(教師用指導書実践編『小学音楽 音楽のおくりもの 5』教育出版、2005年、p.58)等の記載がみられる。
- 2)マルコム・テイト、ポール・ハック著、千成俊夫他訳『音楽教育の原理と方法』音楽之友社、1991年、pp.157-160
- 3)山田潤次「うたうこと、弾くことは必要か」八木正一・吉田孝編著『新・音楽科宣言』学事出版、1996年、pp.46-47
- 4)文部省『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社、1999年、p.40、p.57
- 5)同上 pp.57-58
- 6)千成俊夫「音楽科における教材組織化の原理」千成俊夫編著『音楽科授業改造入門』明治図書、1982年、p.59
- 7)同上 p.59の表の表記を一部省略してまとめた。
- 8)八木正一「教材を分析する」『たのしい音楽授業づくり 4つの方法』日本書籍、1989年、pp.38-43
- 9)「冬げしき」を今回の授業で取り上げたのは、対象児童が5年生であり、本プランの実施時期が11月後半の初冬であることをふまえた上でのことである。また「冬げしき」は、子どもが分析するにあたって、曲の長さや音楽構成が適当であると考えた。
- 10)教師用指導書研究編『小学音楽 音楽のおくりもの 5』教育出版、2005年、p.84
- 11)前掲 4) p.59には、高学年の目標として音の重なりが重視されている。
- 12)本プランは全2時間扱いであるが、紙面の都合上2時間目の展開は割愛する。また学習指導案の中には評価規準も設定したが、紙面の都合により省略する。
- 13)長島真人「音楽科の内容」吉富功修編『音楽科重要用語の基礎知識』明治図書、2001年、p.90

参考文献

- 東川清一他編 中嶋恒雄他著『子どもと音楽』第4巻、同朋舎、1988年
東川清一他編 三好恒明他著『子どもと音楽』第5巻、同朋舎、1987年
八木正一・吉田孝編著『新・音楽科宣言』学事出版、1996年
文部省『新しい学力観に立つ音楽科の指導の工夫』教育芸術社 1995年
千成俊夫編著『音楽科授業改造入門』明治図書、1982年